

断りのメール文において韓国人日本語学習者が日本語母語話者と異なる働きかけ方をするのはなぜか ——言語管理理論の枠組みを用いた事例研究を通じて——

● 吉 田 さ ち

1. はじめに

交渉場面では、相手に働きかけて自分の意図に沿った意思決定をしてもらおうと同時に、必ずしも利害関係が一致しない相手の気持ちを損ねないようにする能力が求められる。

日本語学習者と日本語母語話者が交渉場面で円滑なコミュニケーションを行うためには、日本語学習者が交渉場面でどのような働きかけ方を行っているのか、また、なぜそのような働きかけ方を行うのか、について明らかにする必要があると思われる。

吉田(2009)は、日本人の友人からの誘いに対する断りのメール文における働きかけ方について、韓国人日本語学習者(KJ)34名¹と日本語母語話者(JJ)24名²の比較を行った。KJとJJの執筆した断りのメール文を、相手に対する働きかけの機能を担う最小部分である「機能的要素」(熊谷・篠崎2006)に分割したところ、表1のように、直接依頼、名のり、共感、関係維持、謝礼、好意的反応、代案提示、気配りの8種類の機能的要素において、KJとJJの使用率に10%以上の差が見られた。

表1. 10%以上の差が見られた機能的要素

※機能的要素ごとに使用率の高い方を網掛けした。

	[直接依頼]	[名のり]	[共感]	[関係維持]	[謝礼]	[好意的反応]	[代案提示]	[気配り]
KJ	11.8%	35.3%	64.7%	55.9%	64.7%	14.7%	38.2%	5.9%
JJ	0.0%	4.2%	41.7%	41.7%	87.5%	45.8%	54.2%	16.7%

断りのメール文でKJがJJと異なる働きかけ方をする背後には、次の2点があるのではないかと考えられる。

- (1) KJの母語(韓国語)の規範に基づいた運用
- (2) KJの目標言語(日本語)の規範に基づいた運用

本稿では、この仮説が正しいかを確かめることを目的として、KJに対して行ったインタビュー調査の結果について質的に考察する。

日本語の断りのメール文に対するKJの評価時の語りを、言語管理理論(Neustupny 1994)の枠組みを用いて分析し、評価時にどのような規範が用いられ、その規範によってどのような調整行動がとられているかについて明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

2-1. 評価対象

「生活場面で必要となる日本語書きことば」データベース³内の断りのメール文のうち、上記の

1 韓国人日本語学習者34名の属性は次の通りである。性別：男性4名、女性30名。年齢：平均24.0歳。所属：都内の日本語学校・大学に通う学生。滞日年数：平均0.8年。日本語学習年数：平均3.5年。

2 日本語母語話者24名の属性は次の通りである。性別：男性9名、女性15名。年齢：平均19.9歳。所属：都内の大学に通う学生。

8種類の機能的要素（直接依頼や名のりなど）を含むメール文10編（KJ 執筆5編とJJ 執筆5編）を選び、評価対象とした。評価対象のメール文10編は巻末に掲載した。

2-2. 調査対象者

調査協力者のKJ13名の属性は以下の通りである。

表2. 調査対象者13名の属性

母語	韓国語
職業	大学院生9名、専門学校生2名、日本語学校生1名、塾講師1名
性別	女10名、男性3名
平均年齢	29.8歳
平均滞日年数	3.0年

2-3. 調査手順

- (1) メール文の並べ替え作業：KJ13名を対象に、始めに課題文⁴を示し、それに沿って書かれた10編のメール文（KJ 執筆5編とJJ 執筆5編）について、日本人の同性・同世代の親しい友達に宛てて書く場合に、自分がふさわしいと思う順番に並べ替えてもらった。並べ替えは、執筆者の母語について伏せた状態で行われた。
- (2) フォローアップ・インタビュー：並べ替え作業の終了後に半構造化型のフォローアップ・インタビューを行い、並べ替えの理由などについて質問した。調査協力者が特定の箇所について評価的なコメントをくださった際には、協力者本人が書き手だった場合にそのように書くかどうかについても質問した。

3. 分析方法

3-1. 分析の枠組み

分析には、言語管理理論（Neustupny 1994）の枠組みを用いることとする。

はじめに、本研究で分析に援用する言語管理理論の特徴について日本語教育学会（2005）をもとにまとめる。

言語管理理論は、1970年以来、一部の社会でポスト近代化の過程によって多くの言語問題が表面化した際にできた新たな理論的枠組みである。

対象とされる言語問題は、伝統的な文字や語彙の問題だけではなく、性と言語、言語障害、言語教育、言語とインタレスト（関心・利害関係）、あるいは権力の問題などがある。言語管理理論はこれらのすべての問題を扱うための統合的な枠組みを提供するものである。

言語管理理論の大きな特徴は二点ある。一点目はすべての問題の根源を談話で探ることである。団体、国などの「組織管理」は、談話での「単純管理」の上に立つべきという主義に立つ。二点

3 4つの交渉場面に関する学習者の作文186編と母語話者の作文96編が収められている。詳細は、宇佐美・森・吉田（2008）を参照されたい。

4 課題文の概要：予め日時と待ち合わせ場所を指定したコンサートの誘いのメールを日本人の同性・同世代の友達からもらった。あなたはそのコンサートに興味がない。その友達からはこのような誘いが多くて少し困っているが基本的にはいい友達だと思っている。相手を怒らせたり傷つけたりしないようにメール文を書いて下さい。

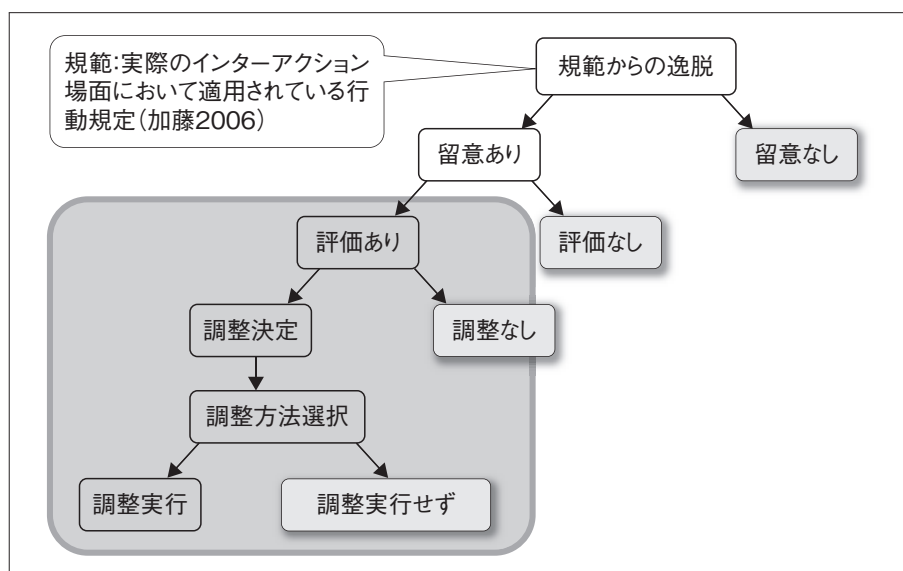


図1. 言語管理のプロセス (加藤 2010)

目の特徴は、種々の管理が同じようなプロセスを通して展開するということである。そのプロセスは以下のとおりである。

- (1) コミュニティに一定の規範があり、その規範への「逸脱」(「違反」)が起こる。
- (2) 逸脱が留意される。
- (3) 留意された逸脱が否定的(あるいは肯定的)に評価される。
- (4) 調整がはかれる。
- (5) その調整が遂行(実施)される。

加藤(2010)は、言語管理のプロセスを以下のような図で示している。本稿で分析の対象とするのは、プロセスの(3)~(5)にあたる部分で、図1のなかで四角く囲まれている部分である。

本稿では、「規範」を「実際のインタラクティブ場面において適用されている行動規定」(加藤2006)と定義する。また、規範は、規範の選択領域から、①目標言語規範、②母語規範、③接触場面規範⁵、④個人規範⁶、⑤他言語規範、⑥共有規範⁷に分けられる(加藤 2006)。

3-2. 分析の手順

分析は次の手順で行う。

- (1) インタビューの文字化資料の中で、調査協力者が、メール文の特定の個所について何らかの評価を行っている部分をマークする。

5 接触場面であることによって変形や生成される規範のこと。これには内的場面などからの規範を緩和・強化したもの、全く新たに生成されたものなどが含まれる。中間言語もここに含まれる。

6 個人的な好みや性格などが反映して形成されるような規範。

7 比較的ユニバーサルな、少なくとも当該接触場面の参加者が共通して持っている規範。「協調原理」や「丁寧さの原理」なども共有規範の一つである。

- (2) マークされた個々の評価が、規範の選択領域からの分類の（①目標言語規範、②母語規範、③接触場面規範、④個人規範、⑤他言語規範、⑥共有規範）のどれにもとづいているかでコーディングする。
- (3) 調査協力者自身が実際に「調整」を行っていると言及しているかどうかでさらに下位分類する。なお、本研究での調整は、インターアクションの生成以前の事前調整（規範の選択やストラテジー選択を行う調整など）も含める。
- 分析には、QDA ソフトウェアのひとつである「MAXQDA」を用いた。

4. 結果と考察

表3は、インタビューの文字化資料に現れた、評価と調整の組み合わせを示したものである。

もっとも依拠された規範から順に、個人規範149件、目標言語規範38件、母語規範32件、接触場面規範6件、他言語規範1件となっていた。共有規範にもとづく評価は今回のデータには現れなかった。

表3. 評価と調整の組み合わせ

※網掛けのセル：協力者の語りに現れなかったもの。

	評価の種類	調整の実施への言及	調整の内容
1	目標言語規範にもとづく評価 (38件)	あり	(1)目標言語規範の促進
		なし	(2)目標言語規範の抑制
2	母語規範にもとづく評価 (32件)	あり	(3)母語規範の促進
		なし	(4)母語規範の抑制
3	接触場面規範にもとづく評価 (6件)	あり	(5)接触場面規範の促進
		なし	(6)接触場面規範の抑制
4	個人規範にもとづく評価 (149件)	あり	(7)個人規範の促進
		なし	(8)個人規範の抑制
5	他言語規範にもとづく評価 (1件)	あり	(9)他言語規範の促進
		なし	(10)他言語規範の抑制
6	共有規範にもとづく評価	あり	(11)共有規範の促進
		なし	(12)共有規範の抑制

もっとも多かった個人規範にもとづく評価と調整についての事例を見ていく。事例におけるQは、調査者を示す。それ以外の記号は調査協力者を示している。事例の記載において、内容に影響しない調査者のあいづちなどは適宜削除した。また、()内は、重なり発話を示す。

事例①：「個人規範にもとづく評価」と調整（調整内容：「個人規範の促進」）

K13：今ちょっと、歳が結構あるので、それ、それ、それで、なんか、ちょっと、こんなふうに、あんまりはっきり言わないと思います。

Q : じゃあ、韓国人でも若い人だったらー、
K13 : 多分 (Q : もしかして)、
Q : はっきり言うかも (K13 : そうですよ) しないですか。
K13 : わたし行かないっと言うかもしれません。
Q : かもしれない (K13 : はい) ですか。
K13 : まあなんか、もう、なんか、もし、
Q : うん。
K13 : 行きたくないっという人も、いるかもしれません。
Q : あー。
K13 : うん。
Q : そのへん、じゃあ、もう性格もあるし、年代も (K13 : ね、そうですよ、やはり) ある
しっという、感じ (K13 : はいはい) ですかねえ。
K13 : そうですね。わたし、と、やはり、なんか、日本に来る前に、
Q : うん。
K13 : なんか、仕事したから、
Q : そうですか。
K13 : 仕事をする場合なら、いろんなーことがありますよね。難しいこともあるしー、ま、上下
関係もあるし、いろんなことがあって、
Q : 大学生は (K13 : **)、まだそれー、
K13 : そうですよ、あんまり (Q : 分からない)、うん。分からない。そのぐらいまで、相手
の立場から考えると、相手のどのぐらいに傷つかないとか、
Q : うん。
K13 : そんなことまでは、まあちょっと若いから、
Q : うんうんうんうんうんうんうん (K13 : まあ若いから)。
K13 : 考えなくっても良いと思いますけど、
Q : うん。
K13 : なんかやはり、性格もそうなんだし、
Q : うん。
K13 : まあ、社会の (Q : 社会経験) 生活を、したかどうかについても (Q : 関係あると思う)
違うと思います。そうですね。わたしなら、まあ、今、今、歳ぐらいなら、ちゃんとい
ろんなこと考えた後で、ま、いろんなことを、まあ、説明したりすると、
Q : なるほど。
K13 : ようにするんですけど、あんまり、なかなか (笑できないんです)。

事例①は、K13が自分の評価観について語っている部分である。K13は来日以前に社会経験を持っており、そのことが自分の評価のありかたに関わっていると内省している。社会経験があるため、K13自身、「相手の立場から考え」て、相手に「はっきり言わない」という規範を持ち、実際に「いろんなこと考えた後で (中略) いろんなことを (中略) 説明したり」するようにしていると説明している。この事例からは、K13が自らの社会経験に由来する個人的な規範を持ち、その個人規範を、日本語を運用する際にも促進させていることがうかがえる。

事例②：「目標言語規範にもとづく評価と調整」(調整の内容：「目標言語規範の促進」)

Q : 始めに名前は (K12: うん) 言わない。

K12: はい。

Q : 日本語で書く時は、どうですか？

K12: 書きます (Q: やっぱり言わない)。

Q : か、あ、そこは、日本語では書く (K12: はい) っていうことですか。そこはなんでそういう違いが、あの、使い分けて (K12: うん) ますかね？

K12: 日本人からメールをもらったら、

Q : はい。

K12: 必ずこういうふうに書いてあるので、(Q: 相手の名前書いて「K12さん」みたいな) 多分、はい、多分礼儀だと思う、思いました。

事例②は K12 が、KJ092 の執筆したメール文 (添付資料を参照) について語っている部分である。KJ092 のメール文では、冒頭で「小林さん、」と相手の名前を呼び掛けている。これについて、「日本人からメールをもらったら、必ずこういうふうに書いてあるので (中略) 多分礼儀だと思う」と述べている。ここから、K12 が「日本語のメールでは冒頭で相手の名前を呼び掛ける」という目標言語規範を持っていることが分かる。さらに、韓国語でメールを書く際には、相手の名前を冒頭には書かないが、日本語で書くときには「書きます」と語っている。この事例から、K12 が目標言語規範にもとづく評価を行い、自分自身が日本語でメールを書く際には、その規範を促進させていることが分かる。

事例③：「母語規範にもとづく評価」と調整 (調整の内容：「母語規範の促進」)

Q : あと、その後に自分がこう、お礼にごはんを奢るからって、また誘ってるんですけど、そういう書き方はどうですか？

K07: うーん、そうですね。向こうから、韓国人の感覚だと、こんなにごはんいっしょにしましょうねって言うってても、いついつにしようってあんまり聞かないっていう感じがあるので、そうですね、断る場合では、こういう感じでちゃんと、今度なんかしましょうとか、うん、今度ねとか、こういう言い方を最後にした方が。

Q : はい、いいんじゃないかっていう。

K07: はい、いいんじゃないかって思いました。

Q : あ、ってことは、韓国人の場合は、聞かないってことは、日本人の場合だとどうですか？

K07: はい、なるほど。そうですね。結構、それを真剣に考えちゃうってこともあるかもしれないんですけど、一応、自分だとかいう風に言うんじゃないかなって思いました。

Q : 友達に？

K07: はい、友達に、はい。

(中略)

Q : いつ食べるとか言ってきそうだっていうことですか？

K07: そうではないんじゃないかなって思いました、はい。

Q : あ、そうではないんじゃないか？

K07: これぐらいの言い方だと、正確にいつ。

Q : って話にまではならない？

K07：はい、ならないんじゃないか。

事例③は、K07がKJ085のメール文について語っている部分を抜粋したものである。KJ085のメール文末尾の「今度私がお礼にごはんおごるからいっしょに行こう。」という文について、K07は「韓国人の感覚だと、こんなにごはんいっしょにしましょうねって言うってても、いついつにしようってあんまり聞かないっていう感じがあるので、(中略) 断る場合では、こういう感じでちゃんと、今度なんかしましょうとか、うん、今度ねとか、こういう言い方を最後にした方が(中略) いいんじゃないかって思いました。」と肯定的に評価している。相手が日本人の場合でも、「自分だとかこういう風に言う」(著者注：「最後に誘いの文章を入れる」の意)と述べている。その根拠として、K07は、「これぐらいの言い方だと、正確にいつ」という話にまでならないだろうと考えるからだとしている。この事例から、K07は、断りのメール文の最後に、誘いの文を入れるべきという母語規範を持っており、日本語でメールを書く際にも、その規範を促進させていることがうかがえる。

事例④：「母語規範にもとづく評価」と調整（調整の内容：「母語規範の抑制」）

Q：「理解してね」のところはどうですか？

K08：あー、くどいです。

Q：くどいですか？

K08：「理解してね」って。

Q：言ったりしますか、こう？

K08：あー、韓国語ならすごいふつうに言えると思います。

Q：ふつうに言えますか？ 이해とか。

K08：はい、言うと思います。

Q：日本語にすると、あんまり使わないかな？

K08：あんまりよくない。

Q：よくない感じですか？

K08：あまり言われたことがないので、そういう言い方。

事例④は、K08がKJ095のメール文についてコメントした箇所である。KJ095のメール文中の「理解してね。」という表現について、「韓国語ならすごいふつうに言えると思います。」と語っている。ここから、「断りのメール文で『理解してね。』という表現を使う」という母語規範を持っていることが分かる。一方で、K08は、日本語では「理解してね。」と言い方を「あまり言われたことがない」と内省している。また、日本語では「理解してね。」という言い方をあまり使わないかという問いに対しては、「よくない」「あまり言われたことがないので」と答えている。この返答から日本語では、「理解してね。」という言い方は好ましくないものと評価しており、「断りのメール文で『理解してね。』という表現を使う」という母語規範を抑制していることが示唆される。

事例⑤：「接触場面規範にもとづく評価」と調整（調整の内容：「接触場面規範の促進」）

K13：そんなふうのベンドに興味があると思う。だったら、彼女と一緒に行けば（Q：はい）良い？、どう？、と言う、かもしれませんけど、えー、そうですねえ、ちょっとびっくり

しましたよねえ (Q:びっくり)。

Q : しました? うーん (K13: ええ)。

K13: はい。

Q : 結構こういうメールを、し、やりあってる (K13: あー) 日本人の (笑若者も (K13: そうですか) いるみたいですねえ)。

K13: まあ、やはりー、あたしーたちは、今、ちょっと、今は、日本語を、勉強してるから、やはり、なんか、日本語がまだ、うまくできないから、逆に、こんなふうは使わないんですよね。

Q : はい。

K13: そうですよ。今までは、まあ、あんまり、ほんとに、まあ上手、下手だから、なんとなく、こんな優しい感じで、説明したい、とか、そんな感じで、使うかもしれません。

Q : うーん。

K13: でもー、なんか、やはり、日本人なら、自然に、こんなふうに、まあ (Q: なるかもしれない)、すぐー、かもしれませんですよええ。

事例⑤は、K13が、JJ134のメール文について語っている部分である。JJ134のメール文中の「●●さんなら、バンドのコンサートにも興味あるんじゃないかな。彼女を誘って見たら?」という二文について、「ちょっとびっくりしました」と評価している。それと同時に、「やはり、日本人なら、自然に、こんなふうに」書くかもしれないと考えている。ところが、K13自身は、「こんなふうは使わない」と語る。それは、自分たちは今は日本語を勉強中であり、「日本語がまだ、うまくできないから」「優しい感じで説明したい」ためであり、実際に「そんな感じ (著者注: 優しい感じ) で、使うかもしれません」と述べている。

この事例から、K13が、「日本語でのメール文は (日本語能力が低いため、あえて) 優しい感じで説明する」という接触場面規範を持ち、実際にもその規範を促進していることがうかがえる。

事例⑥: 他言語規範にもとづく評価

K09: でも、やっぱり最後に、「決める前に私のことをもう一度聞いてくれませんか?」。

Q : ここですか?

K09: ええ。

Q : ここはどういう印象ですか?

K09: これ、欧米の人はするかもしれないんですけど、以前欧米の人がある友達にそういう言い方することを。

Q : 欧米人。

K09: はい。欧米人に言ったことがあるんですけど、そういう人だけの傾向なのか、みんなそういう傾向なのか、それだけのものなのかかわからないんですけど。聞いて、私も隣で聞いて、えっと思ってたんですけど。

Q : うーん。

K09: 合理主義じゃないんですか? そちらの人は。欧米の人は合理主義なので。

Q : あ、合理主義?

K09: 欧米の人は合理主義なので。

Q : あ、はい。

K09：なのでそうかもしれないんですけど、やっぱり「決める前に一度聞いてくれませんか？」。

Q：これは冷たいですか？

K09：ええ。

Q：ああ。

K09：私怒ってるよ。

Q：怒ってるよって感じがするんですか？

K09：それを相手に知らせた感じ。

事例⑥は、K09の KJ092のメール文についての語りの一部を抜粋したものである。KJ092のメール文には「(そしてコンサートを誘ってくれるのはありがたいですけど) 決める前に私のこともう一度聞いてくれませんか。」という一文がある。これについて K09は、「欧米の人はするかもしれない」と語っている。このことから、「欧米圏の言語において『決める前に私のこともう一度聞いてくれませんか。』といった表現を使用する場合がある」という他言語規範を持っていることが分かる。この表現について、K09は「私怒ってるよ」ということを「相手に知らせた感じがする」と否定的に評価している。

以上、本章では、インタビューの語りに現れた、評価と調整の組み合わせを示したうえで、実例を挙げながら考察した。今回のデータにおいては、6つの規範にもとづく評価のうち、「個人規範にもとづく評価」の割合が最も高かった。その他に、「目標言語規範にもとづく評価」や「母語規範にもとづく評価」の割合も比較的高くなっていた。

5. おわりに

本稿では、断りのメール文で KJ が JJ と異なる働きかけ方をする背後に、(1)KJ の母語（韓国語）の規範に基づいた運用、および、(2)KJ の目標言語（日本語）の規範に基づいた運用があるという仮説を立てた。その仮説を検証するため、KJ に対するインタビューの語りに現れたデータを分析した。

その結果、仮説(1)に挙げた KJ の母語の規範に基づいた運用（本稿での「母語規範の促進」）と仮説(2)に挙げた KJ の目標言語の規範に基づいた運用（本稿での「目標言語規範の促進」）の両方が行われていることが確かめられた。

しかし、今回のデータにおいては、「母語規範」や「目標言語規範」の影響だけでなく、個人の社会経験や性格、発達段階に由来する「個人規範」が、KJ の働きかけ方に強く影響していたことが明らかになった。

その他にも、「接触場面規範」や「他言語規範」も参照されることがあることが分かった。また、KJ の持つ規範は促進されるだけでなく、抑制されることがあることも裏付けられた。

本稿は、学生を中心とした KJ13名に対する事例研究であるため、本稿の結果を KJ 全体に一般化することは難しいと思われる。他の属性を持つ KJ との比較も必要であろう。

また分析では、規範・評価・調整についての分類や判定を調査者が単独で行った。今後は、他の判定者との一致率を出し、分類や判定についての信頼性を高める必要があると考えられる。

付属資料：評価対象のメール文10編

本調査で評価の対象にしたメール文10編を以下に載せる。メール文の冒頭の<>内は、執筆者の記号であり、KJ は韓国語母語話者、JJ は日本語母語話者を示す。

<KJ085>

小林さん

***です。

元気？

いいコンサートさそってくれてありがとう。

私ね、ちょうど用事があったさ。

私もほんとうにいきたいんだけどいけないとおもうので先にメール送るね。

またいいコンサートあったらさそってね。

今度私がお礼にごはんおごるからいっしょに行こう。

またね。

<KJ088>

小林さん、

*です。

メモありがとうございます。

22日のコンサートのことですが、その日はあいにく他の約束があるのでちょっと……

最近いろいろお誘いしてもらったりしたんですが一緒に行けなくてごめんなさい。

今度機会があったらぜひ行きます。

本当にごめんなさい。

楽しいお時間になるのを心から祈ります。

では、また。

<KJ089>

小林さん、こんにちは。

私***です。

こないだの誘いのメール本当にありがとう！

私も本当に行きたかったコンサートで、ちょーうれしかったよ。

でもね、急に、その日に韓国から友達が来るの。

私も昨日知って、びっくりしたわ。

本当に残念だと思うけど、仕方がないね。

本当にごめんね。

せっかくのチャンスだったのに。

私がお詫びとして、友達が帰ったら、おいしい韓国料理作ってあげるわ。

本当にごめんね。

後で私からまた連絡するね。

じゃね。

<KJ092>

小林さん、

夜7時ですか。

バイトの時間が変わって残念ですが行きません。

そしてコンサートを誘ってくれるのはありがたいですけど
決める前に私のこともう一度聞いてくれませんか。
今度は残念でしたが次は一緒に行きましょう。

<KJ095>

ごめん！

一緒に行きたいけど、行けないです。

この頃疲れて、コンサートよりは家で休みたいです。

あなたと一緒にいきたいけど、私たちはいつもよくいろいろ見に行くから、
今回は休むのはどう？

これからも良い機会はもっと多いからね、悪いけど、理解してね。

本当にごめんね。

<JJ133>

小林さん、こんにちは。

コンサートに誘ってくれたのは嬉しいんだけど、△△はあまり興味ないんだ。

今回は遠慮させて下さい。

ごめんね。

でも、他に興味を持てるコンサートがあったら、是非一緒に行きたいので、
また声をかけて欲しいな。

それでは。

<JJ134>

小林さん、

コンサートのお誘いありがとう。

でもごめんなさい！

最近学校の授業の予習やレポート書きの量が増えたからしばらく忙しいんだ。

22日の夜も、どうしてもやらなきゃいけないことがあって、出かけられそうにないの。

●●さんなら、バンドのコンサートにも興味あるんじゃないかな。

彼女を誘ってみたら？

本当にごめんね。

バイバイ！

<JJ138>

小林さんへ

△△のコンサートがあるんですか、私の知らないバンドだけれど面白そうですね！

お誘い本当に嬉しいのですが、実はその日の予定が変わってしまって、用事が入ってしまったんです。

出来ることなら行きたかったんだけど…残念です。

今後またご一緒する機会があれば、是非誘って下さいね。

私は行けないけれど、コンサートを楽しんできて下さい。

帰ったら感想を聞かせて貰えると嬉しいな。
それではまた。

<JJ152>

小林さん

メールありがとう。

せっかくのお誘いなんだけど、私は△△というバンドのことあまりよくわからないし、今はあまり興味がわからないので、今回のコンサートはお断りしたいと思います。

ごめんね。

小林さんはめいっぱいコンサートを楽しんで来てください。

また今度一緒に遊びに行こうね。

じゃあね。

＊ ＊

<JJ153>

小林さん

お誘いどうもありがとう。

けど、僕はそのバンドのこと良く知らないし、あんまり気分じゃないんだ。

どうせ行くなら、そのバンドを好きな人を誘っていった方が楽しいんじゃないかな？

だから今回は遠慮しておくよ。

ごめんね。

参考文献

- 宇佐美洋・森篤嗣・吉田さち (2008) 『『生活場面で必要となる日本語書きことばデータ』の収集と分析』『日本語教育学世界大会2008予稿集』 2、日本語教育学会
- 加藤好崇 (2006) 「接触場面における文体・話題の社会言語規範」、『東海大学紀要、留学生教育センター』 16、東海大学
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション-日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範-』、東海大学出版会
- 熊谷智子・篠崎晃一「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」『言語行動における「配慮」の諸相』、国立国語研究所
- ネウストプニー (1995) 『新しい日本語教育のために』、大修館書店
- 日本語教育学会編 (2005) 『新版日本語教育事典』、大修館書店
- 村岡英裕 (2006) 「接触場面における社会文化管理プロセス—異文化で暮らすとはどのようなことか—」、『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』、国立国語研究所
- 吉田さち (2009) 「韓国人日本語学習者のメール文における『断り』—日本語母語話者との比較を通じて—」『日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究：「日本語能力の評価基準・項目の開発」成果報告書』、国立国語研究所
- Neustupny, J.V.(1994) “Problems of English contact discourse and language planning” English and language planning: A Southeast Asian contribution (eds. InKandiah, T.and Kwan-Terry, J.) Singapore: Academic Press